ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾３０
福島工業高等専門学校
編集　図書委員会　ビブリア編集部
平成１０年７月１５日

福島高専図書館報　第８５号

巻　頭　言

私たちは話し言葉により、その場で相手に考えを伝えるだけでなく、文字に書いて伝達する。どちらも社会生活に欠かせない。

文字で伝える情報には、小説など文学作品のように、人の感情や情景描写などの伝達もあれば、数学や物理の解説の様に純粋に論理的な事項の伝達もある。現実にはこれらの混在した記述が多い。

私は技術畑での生活が長い為か「習い性」となって、文学作品よりも科学技術関連文を読むことが多い。矢張りそれらは論理的な部分と非論理部分が混在している。この様な場合、論旨が明快で、論理的に矛盾の無い事が必須で、その上に個性的で、表現の美しさが備わっていれば、気持ちよく読める。

そこで、書き言葉（文章）の扱い方について日頃の思いを綴ってみたい。当然、読む立場と書く立場の双方から考える必要がある。

これだけ多数の印刷情報が出回っている中で、自分に必要な情報文を選び出すのは至難のわざである。恐らく各人、書評を読んだり、友人に聞いたり、インターネットで検索したり、いろんなルートで種々の情報を仕入れていると思われる。しかし選択するのは自分である。年齢、生活環境で選択基準は様々で、人からとやかく言われるものではないが、私なりの基準を述べて参考に供したい。

（１）一度読んで興味を覚えた著者の本を系統的に読む。（その内に著者に興味を持ったら、その生い立ちや経歴も調べる。）

（２）始めて出会った著作の場合、１、２ページ読んでみて、記述に客観性があり、特定の考え方を押しつける傾向がないか、

（３）前書きを読んでみて共感出来るか、

（４）調査報告などの場合は出典や参考文献が巻末や脚注に挙げてあるか、

（５）文章が平易で読み易いか、また読み易くする工夫がされているか、等である。

従って自分が書く立場になった時は、上記の各項を念頭に置いて書けばよい。この様な選択基準で、安心して読める本の著者が何人か出てきた。私見を恐れず挙げてみると、河合隼雄、髙坂正堯、立花隆、中村桂子、養老孟司などである。当然他にも優れた著者が多くいる筈で、まだ読んでいないから挙げられないだけである。

書き言葉は大切で便利であるが、言葉や文章で全て（人の活動や思考）が表されると考えるのは危険と思われる。言葉によって人々の文化は発展する一方、言葉によって自らの思考に枠をはめている様でもあるから。

《電気工学科教官　永木猛弘》

目　次

巻頭言（永木猛弘）・・・・・・・・１
新任の先生方の「私の薦める一冊」・・・・・・・・２
学生による「私の薦める一冊」・・・・・・・・５
図書館便り・・・・・・・・１３
お知らせ・・・・・・・・１４
感想文等募集のお知らせ・・・・・・・・１５

新任の先生方の「私の薦める一冊」

＜機械工学科教官　一色　誠太＞

「ヒートアイランド 灼熱化する巨大都市」　齋藤武雄著、ブルーバックス　講談社（1997年）　定価860円

2000年まであと500日余りとなり、いよいよ21世紀が到来しつつあります。夢と希望がたくさんあると思います。

これまで読んだ、文学小説から果ては漫画の本までの中で、「私の薦める一冊」として最近読んだ「ヒートアイランド」を選びました。バラ色だと思っていた21世紀について、工学者の立場から警鐘を鳴らしていることに大変ショックを受けたからです。

20世紀は資源を浪費して来た時代と思います。その結果、人口爆発、エネルギー資源枯渇、CO_2ガス増加、地球温暖化、森林の減少、砂漠化などの問題が発生しました。「ヒートアイランド」によると、これらの難問を解決しないと、人類は生き残っていけないそうです。

東京の都心はこのままでいくと温暖化の影響で、21世紀中程には夏の夕方6時の気温が摂氏46度になるそうです。そうなったら、現在のエアコンでは間に合わないでしょう。何か都市全体を冷却する巨大な装置が必要となってくるかもしれません。

この本を読んで、例えば東京湾の海水を都心のビル群や道路に張り巡らされたパイプ網に行き渡らせて都市空間を冷却するような、近未来都市の空想をしては如何でしょうか。

＜電気工学科教官　山本 敏和＞

「隠された十字架　－ 法隆寺論 －」　梅原猛著　新潮社（1972年）2200円

少々古い本ですが本書を推薦します。この本については、高校の地学の授業中にほとんど１校時を費やして教官から詳しい紹介がなされました。そのときはその内容に大変驚き、また大変興味を覚えて記憶に留めました。

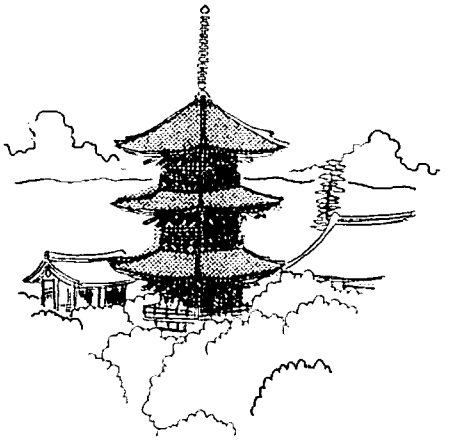
法隆寺は聖徳太子をまつり、国宝の美にあふれた寺院ですが、著者はまず法隆寺に関する七不思議を提示します。

（１）日本書紀、続日本紀における法隆寺建立に関する記述の曖昧さ。
（２）法隆寺資財帳に同寺の消失、再建について記載がない。
（３）中門の真中に出入りの邪魔になる柱がある。
（４）金堂に本尊が３体ある。
（５）塔の高さが資財帳には現実の1.5倍に記録されている。
（６）開ければ地震により寺院が崩壊すると伝承されて明治17年まで約1200年間、秘仏として厳重に隠されてきた救世観音。
（７）仏舎利とともに聖徳太子を供養する聖霊会。

著者は資料をもとに、「常識ではなく理性に基づき判断する」ことによってこれらの謎の解明を試み、「法隆寺は聖徳太子の怨霊封じの寺である」という大胆かつショッキングな仮説を提示します。その結論に至る考察は説得力があり、内容の恐ろしさにもかかわらず、疑問が解き明かされていく過程では優れた推理小説を読んだ時のように非常に知的興奮を覚えました。本書の内容が歴史的に正しいかということについては、私などでは判断できないのですが、資料をもとに理性的に判断し、真理を求めようとする精神に強い感銘を受けました。

本書は現在も発行されています。また本校の図書館で検索したところ２件ヒットしましたので、まずは図書館で手にとってみることを強くお薦めします。

実は冒頭に記した授業の１年半後には、修学旅行で同寺を見学したのですが、本書を読んだのは更に１年半後でありました。のんきで空想好きな私は修学旅行の１週間前には本書のことを気にしながらも、広隆寺の弥勒菩薩と興福寺の阿修羅像を念頭に置きながら光瀬龍のＳＦ「百億の昼と千億の夜」（早川書房）を読んでおりました。



＜電気工学科教官　山田 貴浩＞

「面接の達人」
中谷彰宏著、ダイヤモンド社

この本は、今年度就職活動をしている５年生や来年度就職活動をすることになる４年生はもちろん、それ以外の学年の皆さんにもお薦めしたい１冊です。

「面接」というと、当たり障りのないことを、ある意味仮面をかぶって受けるものと誤解をしている人が多いようです（私もかつてそうでした）。実際の面接では、「いかに自分のことを知り、相手（面接官）に対して自分の魅力をアピールし、売り込むか」に合否の鍵があるということがこの本を読むと分かります。そのため、この本には面接の「模範解答」は書いてありません。つまり、面接の答えは個人そのものであるため、答え方も当然、人それぞれ違うからです。

私自身、本校で過ごした学生生活を振り返ると、この時期の５年間というのは、勉強やクラブその他で得るものが最も多い時期です。その５年間で成長した（成長している）自分を再認識するということも重要なことだと思います。

この「面接の達人」を、単なる就職試験対策としてだけではなく、自分自身を見つめ直すきっかけとして、一度読んでみてはいかがでしょうか。

＜物質工学科教官　鴨下 祐也＞

「沈黙の春」
レイチェル・カーソン（青木梁一訳）
新潮社(1987)

環境問題を扱った本としては古典にあたる本で、約35年前に書かれたものです。現在では考えられないような害虫駆除を行っていた事実にも驚かされますが、これに対する著者カーソンの批判は、非常にわかりやすく説得力があります。当時に比べれば、農薬のマイナス面に対する啓蒙は、それなりに進んでいると思えます。しかし、本書に挙げられている生々しい中毒の実例を前にすると、認識を新たにできるのではないでしょうか。

著者は環境中に放出される化学物質の問題を指摘しているわけですが、この問題は35年を経た現在において、まったく解決されていないばかりか、深刻さを増しています。残念ながら、新規技術が思いもよらない悪影響を及ぼすことは、今後さらに増えることでしょう。そこで、これからの社会を担うみなさんには、自分の作ったものはもちろん、身の周りの物事に対して、将来起きるかもしれない悪影響に対する洞察力、本物の警告を見分ける能力を身に付けてほしいと思います。そして、この一冊は、そのような思考を身に付ける手助けになることと思います。

＜建設環境工学科教官　芥川 一則＞

「人間における運の研究」
米長邦雄・渡部昇一著、致知出版
定価1200円

一攫千金をしたときなど「彼奴は運のいい奴だな」といった会話をよく耳にすることがある。例えば、宝くじに当たったとか、競馬で万馬券を手にしたときである。しかし、この本で扱われている「運」とはそのような場当たり的なものではない。

ご存じの方もおられると思うが、米長邦雄氏はプロの棋士であり、渡部昇一氏は上智大学教授である。この二人が対談形式で、「運」について論議した本がこれであり、その主題は「運」の捉え方である。

私自身も「運」というものに非常に興味を持っているが、私の「運」についての疑問に対して一定の解答を与える内容となっている。特に、「幸運の女神は笑いと謙虚を大いに好む」という捉え方には同感できるものがある。

また、幸田露伴が述べた「幸福三説」についての論議も非常に興味深いものがある。この三説は「惜福」、「分福」、「植福」という考え方である。詳細については本書を当たられたい。

最後に人生は「運」のみで渡っていけるものではないが、自分が人生に躓いたときや、「運」を意識せざるをえない場面に直面したときには「運」というものをじっくり考えてみることも大切な作業だと思われる。その時の参考書としても薦めたい一冊である。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科教官　夏井 宏＞

「勇断の外相　重光 葵」
阿部牧郎著　新潮社（1997年）

1970年９月、私はジェトロに入って初めて海外赴任した。アフリカ赤道直下にあるタンザニア国、独立後10年目で世界最貧国、社会主義国家建設に全国民が燃えていた。単独駐在事務所の所長は同時に調査マン、ＰＲマン、経理マン、であり円借款、プラント建設、調査団応接、外交官パーティー等々に追われる毎日であった。
ある日、周囲の目が違うことに気が付いた。その時、自分が日本人であること、日本を代表していることに気が付いた。日本は良い国であって欲しい、美しい国、豊かな国、強い国、尊敬される国であって欲しいと願うジェトロマンになっていた。
「勇断の外相」は伝記小説である。重光の歴史はそのまま日本の現代史である。東西文化の架け橋、戦争と平和の架け橋、国際社会と日本の架け橋であった日本人、優秀な外交官であった重光が、もしいま生きていたら、世紀末の混迷の中にある日本を「存在感のある日本」として国際社会に夢と希望を与えてくれただろうに.....。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科教官 中野 良樹＞

「アルジャーノンに花束を」
ダニエル・キイス著　早川書房
(1989年)　1500円

いやー、参ったな。どんな本を薦めれば良いのやら。心理学の専門書なんて自分で読んでても頭痛くなるくらいだから、とても人には薦められないし。というわけで、上の本を紹介します。
話の筋は、「知能は低いけれど、気は優しい青年のチャーリイ・ゴードン。ある日、彼は知能が飛躍的に高まる脳外科手術を受けました。手術はめでたく成功し、チャーリイの頭はどんどん良くなりました。それとともに、目の前には新しい世界が広がっていくのですが…。」というものです。いまさら薦めなくても、読んだ人はたくさんいるでしょう。でも、特に心理学に興味がある人には、何度でも読んで欲しい本です。とにかく、話のいたるところに心理学的な問題がさりげなく織り交ぜてあるのです。
心理学なんかやっていると、よく人から「じゃあ、他人の心が読めるんですか？」なんてことを聞かれます。もちろんそんなことはできないし、そもそも他人の心や自分の心を知ったからといって、人間は幸せになれるのだろうか。この本を読むと、そんなことを考えてしまいます。仮に知ったつもりでいても、それが正しいかなんて誰にも分からないし。結局、大切なのは人の心を「知る」ということではなくて…、まあこの先はみなさんが本を読んで自分で考えて下さい。では、失礼。

＜一般教科教官　高橋宏宣＞

「６９ sixty nine」
村上龍著　集英社文庫（350円）

働きだしてみれば、学生時代ほど懐かしいものはない。楽しかったなあ。
そこで、はじけるように明るい青春小説を一冊。村上龍「６９sixty nine」。
この本くらい腹を抱えて笑える純文学も少ない。とにかく面白い。保証します。この本に出てきて、映画を作ったり、バンドを組んだり、バリケードストライキをしたりする高校生たちの行動理念はただ一つ。女の子にモテること。でも、どうすればカッコよくなれるのか。これは難しい。じゃあ、どうすればいいのか。そんなことを真面目に追求できるのが君たちの年代でもあるし、特権でもある。
が、ほどほどに。この本の面白さは保証するけど、この本に影響を受けて、どんでもないことをしでかした場合の君たちの人生までは補償しかねる。念のため。
勢いあまって、私はわざわざ龍の故郷佐世保まで行って、この小説の舞台とおぼしき龍の母校を見て来た。普通の高校だったけど。
この本を読んで興味をもったならば次は同じく龍の『村上龍映画小説集』へ。これで青春の天国と地獄が味わえる。二冊推しちゃった。ルール違反か？それに、私の人生を狂わせた村上春樹の紹介もしたい。んー、これは授業中に。

学生による「私の薦める一冊」

＜機械工学科１年　大竹 隼人＞

「大地」 パール・バック著 新潮文庫

本の内容はどんな分野においても、２種類あると僕は考える。著者の感性が主体のものと、読者の感性が主体のものだ。前者では、本の中での出来事を一から十まで描写してあるが、後者は必要最低限のことしか描かれていない。では、どちらが「名作」となりうるのだろうか。

答えは人によって違っていると思うが、僕の答えは後者のほうである。特にパール・バックの「大地」には感動させられた。

この本の内容は、「貧乏な百姓が一所懸命働いて大富豪になる」という実に簡単なものであるが、当時中学生だった僕に大きな感動をくれた。

ところで、なぜ僕がこの本を読んだかというと、ただ、担任だった先生に薦められたからである。薦められたときは、あまり読む気にはなれなかったが、本屋をぶらついていたとき何気なく目に入ったので買って読んでみた。読み始めて、３ページで面白いと思った。まあたいていの本の最初は面白いものだが、この本の場合は面白いと思っているうちに読み終わってしまった。読み終わってからどこが面白かったか振り返ると、やはり自分で想像できる場面なのだ。規則で縛られる学校と自由な学校どちらがいい、と聞かれたら、やはり自由と答える人の方が多いように、小説も、自分で好き勝手に想像できる内容の方が疲れなくて楽しいだろうと思う。極端な例を出せば、「松と杉と椎の木が生えている森」より、「木々がざわめく森」と表現される方が読むことが楽しくなるだろう。

こういう僕の考えに共感できる人、共感できなくても興味のある人は、ぜひパール・バック著の「大地」（新潮文庫）を読んでみればいいだろう。人の人生というものを改めて考えさせられるとともに、現代人の失った何かが見えてくるだろう。

＜電気工学科１年　斎藤 優美子＞

「坊ちゃん」　夏目漱石著　岩波文庫

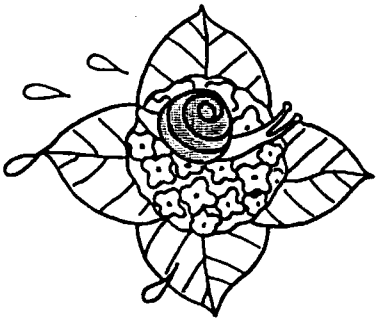
この話は、無鉄砲だが曲がったことが嫌いで正直な「坊ちゃん」が、きゅうくつでねちねちした片田舎の空気の中で、いろいろと対立したりしながら生活する様子を書いた物です。

私がこの本を最初に読んだのは、中学２年生のときでした。そのころ私は友達関係で悩んでいたので、この「坊ちゃん」の、自分の好きなように行動できる性格にとても感心しました。

この話の中に、こんな文があります。「考えてみると世間の大部分の人は悪くなる事を奨励しているように思う。悪くならなければ社会に成功はしないと信じているらしい。たまに正直で純粋な人を見ると、坊ちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。それじゃ学校でうそをつくなと倫理の先生が教えない方がいい。単純や真実が笑われる世の中じゃしょうがない。」

私はこれを読んで、確かにそうかもしれないと思いました。

この本はとても有名だし、読んだ人も多いと思います。だからこそ、今更、読むこともないだろうと思ってしまうかもしれないし、前に読んだしと思ってしまうと思います。しかし、読んでない人は、すごい作品だからこそ有名なのであることも考えて、一度読んでみてほしいと思います。いろいろな価値観も変わるでしょうし。また、前に一度読んだという人でも、また読んでみるのもいいと思います。前に読んだときとはまた違うことを感じとれると思います。



＜物質工学科１年　鈴木 夏奈＞

「白鳥異伝」
荻原規子著　徳間書店／福武書店

図書館で見つけた私のお気に入りは、徳間書店／福武書店の二つの書店から出版されている荻原規子作の「白鳥異伝」です。
この物語は、「風土記」（中でも「常陸風土記」や「肥前風土記」）のヤマトタケルをモチーフとした勾玉をめぐる古代日本の壮大なファンタジーです。
主人公は、遠子（とおこ）と小倶那（おくな）。双子のように育った二人をそれぞれの運命が引き裂きます。大蛇（おろち）の剣（つるぎ）という強大な力の主となり、破壊を繰り返す小倶那。それを知った遠子はついに決心します。一番大切な人だから、小倶那だからこそ、「自分の手で殺そう」と。そして「何者にも死をもたらす」という、勾玉を四つ連ねた首飾り「御続（みすまる）」を求めて旅立ちます。
もともとこの作品は、三部構成でできています。（「白鳥異伝」は、第二部作）直接的に話がつながっているわけではありませんが三つの作品「空色勾玉」「白鳥異伝」「薄紅天女」は、その昔、女神様が神の子にしるしとしてお与えになったという勾玉でつながっています。「空色勾玉」は、遠子や小倶那の先祖の話、「薄紅天女」は、子孫の話です。
あくまでここで私がお薦めするのは「白鳥異伝」ですが、「空色勾玉」「薄紅天女」もとても面白いので、是非一度読んでみて下さい。

＜建設環境工学科１年　松崎 拓歩＞

「高瀬舟」　森鴎外著

本に関する紹介は、森鴎外が書いた「高瀬舟」です。
作者について説明しますと、森鴎外は、島根県出身で、小説家であり軍医でもありました。政府の留学生としてドイツに医学を学びに行く優秀な軍医でもありました。
高瀬舟とは、京都の高瀬川を上下する船で主に、大阪に罪の軽い悪人を回すためにあるような船です。
あらすじを言ってしまいますと、今までに類を見ない珍しい罪人が高瀬舟に乗せられました。名は喜助といって三十歳ぐらいになる男でした。彼は小さいときに、両親が死んでしまい弟と二人で育ってきました。職を探すときも、なるべく二人いっしょで助け合って働いていました。
ある日弟が倒れて、喜助が仕事から帰ってくると、弟がかみそりであごの下を切って自殺しようとしていました。しかし失敗してしまい、のどにささっているかみそりをぬいてくれと喜助に言って、喜助は、考えぬいたすえ弟のかみそりをぬきました。その時町の人がそれを見てしまいました。そして喜助は島流しになり高瀬舟に乗っている、という話です。弟が自殺した理由は、もうこの病気は直らないから兄ばかりに働かせて迷惑だと思ったからでした。
この作品からは、兄弟のやさしさと思いやる心を知ることができるし、また、現在にもいたる安楽死問題を考えさせられます。
果たして、安楽死は、やってよいのか、悪いのか？

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科１年 青木眞樹子＞

「初版グリム童話集」全四巻　白水社

私がお薦めしたい一冊は、「初版グリム童話集」全四巻（白水社）です。
グリム童話とは、だれもがよく知っている例のものです。
「いい年して、今さらグリム童話なんて。」と思う人が多数だと思いますが、これは単なる童話ではないのです。
あのグリム童話の初版なのです。
グリム童話は何度も何度も改訂されて、今の私たちがよく知っている現在の形になったのですが、初版はかなりきついと思います。今では削られてしまった話も多いですし、昔話をもとにしているので、意味のない話、オチのない話や理不尽な話、さらには差別用語だらけの話も多くて「これが本当の童話なのか？」と疑いたくなるものばかりです。内容も、女性は美人でなければ幸せになれないし、男は正直者よりもズル賢い方が幸せになれるという話が目立つのです。

しかし、童話としてでなく、古典文学としてとらえると、かなり興味深い内容になると思います。その時代の背景から導き出される地位と名誉と金を幸せと考える庶民の生活レベルの低さ。やさしさよりもズル賢さを取る生きぬくための知恵、強い者に対するあこがれ。これを読むと人の強さ、弱さや本質が見えてくる気がします。でも夢を持って読むと、ちょっと暗い気分になるかもしれません。

＜機械工学科２年　橋本 辰也＞

「眠れぬ夜に読む本」
遠藤周作著　光文社文庫

最初に、この本を書店で見たとき、本があまり好きじゃない自分でも、これなら読み切れるなと思った。本のタイトルも「眠れぬ夜に読む本」と小難しくなく、何より眠れない夜に読むのだから実用的なのでいいなあと思った。

本文の内容は、作者の遠藤周作さんの過去や日常の出来事、人から聞いた話、物やある事に対する考え、思いなどが描かれている。文の形式も、一冊で一つの事じゃなく、いくつもの項目に分かれているので、何より読みやすく、途中で飽きても読み直しがきくので、本が嫌いな人でも、読みやすいのではないかと思う。

本文では、作者がよく行く茶店の事とか、近所の商店街のこと、犬のこと、作者が「くそー」と思ったことなど様々だ。中でも自分が一番面白かったのは「生命は宇宙から来た。」という事だ。内容は、作者が読んだ本を作者の言葉で表現したもので、最も古い隕石にはバクテリアの痕跡があったといい、生命の原点は、地球より昔に存在していたのかも、などという話だ。

この様に本のテーマが一つに限られてなく、ほんの数分でささやかな知識や、日常に役立つ事などが得られるので、誰でも興味を持てる一冊だと思う。

＜電気工学科２年　丹野 裕貴＞

「黄金拍車」王領寺 静著　角川文庫

この本は、最初のストーリーだけを読むと、「異次元へとばされて、他の世界に行ってしまう。」という、まあファンタジーとしては一般的な、それでもこの平凡な生活、いやになるような日々からぬけだせるなどといった誰もが一度は考えたことがあるであろう、魅力的な物語だ。しかし、この「異次元へとばされる。」こともシチュエーションによっては最悪のものとなる。この主人公は、まさにその最悪のシチュエーションでとばされたといえる。

もしも、自分の好きな女の人に告白されて、もちろんＯＫしようとしたその間にとばされたなら、あなたはどうするだろうか。当然のごとく、一刻もはやく元の世界にもどってその続きをしようと一所懸命になるだろう。まあこんな話だ。

この主人公は、勉強は中の下、背が低く足が短いが、サッカーのキック力だけは誰にも負けない、そんな男である。さてこの少年、元の世界へ帰ろうと必死になるが、そこは十七歳の青年男子、恋多き年頃だ。なんとこちらの世界でも好きな人ができてしまう（もちろん複数）。それでこの女の人達も助けようとして.....。

この本は一回目に読んだ時には、そのいきなりな展開に楽しまされ、二回目は想像力を使って楽しめる。これを読んでつまらなそうだと思っても一度は読んでみるといい。必ずハマるはずだから。

＜物質工学科２年　上野臺 恵介＞

「ロボット工学の三原則」

第一条　ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条　ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が第一条に反する場合はこの限りではない。

第三条　ロボットは前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己を守らなければならない。

これが、今回私の推薦する、アイザック・アシモフ作「われはロボット」の柱となる「ロボット三原則」である。

舞台となるのは、現在よりほんの少し未来。2057年のアメリカ、ＵＳロボット社である。単なるロボットから、人間そっくりのロボットまで、様々なロボットの開発史を９つの短編で綴った作品である。紹介するにあたって、私は５番目のロボット、ＲＢ３４号、ハービイについて書きたいと思う。組立工程上のミスから誕生した読心ロボット。それがハービイだ。ハービイは他のロボットと同じように、三原則に忠実なロボットだった。その特殊な能力ゆえに、人間のエゴに押し潰され、第一条の引き起こすジレンマに殺されてしまう。

さすがにこれを読んだ後は、複雑な気持になった。その他の８つの作品も、短いが心にずしっと感じるすばらしいものばかりだ。

「高専生にもなってＳＦなんてねえ」と言わずにぜひ一読してほしい。機械科の人などにはぴったりだと思う。ロボットとの対話も、夢の話ではないのだから。

＜建設環境工学科２年　長谷川 怜史＞

「三国志」

三国志の世界は、中国四千年の歴史の中でも、最も波乱に富む時代に取材した話である。原作の「三国志演義」の作者は羅貫中、十四世紀中葉の元末明初の人で、劇作家として知られている。もともとこの小説は、晋の陳寿の著した正史「三国志」を小説化したものであるから、史実を踏まえた歴史のスペクタクルと言ってよい。

今から千八百年以上前と言うと、日本ではまだ女王卑弥呼の時代であるが、中国はすでに壮大な文明が確立していた。すなわち、漢王朝である。この王朝は前漢と後漢とに分けられるが、物語は後漢王朝の崩壊するところから始まる。

中原に鹿を逐う----野心に燃える英雄豪傑が各地に決起し、混戦が続く中で、しだいに頭角をあらわしたのが、曹操、劉備、孫権の三人である。

曹操は「天の時」を利し、天下の知力を結集して、中原地域に魏国をうちたてた。

孫権は「地の利」拠り、意気をもって江東の地に呉国をうちたてた。

一方、主人公劉備は、これといった政治的資本に恵まれず、長い間脾肉の嘆きをかこっていたが、その人間的魅力----「人の和」によって今の四川の地に蜀の国をうちたてた。

三者三様にリーダーシップを発揮して、天下を三分するに至ったのである。

主役が引き立つのは、すぐれた脇役がいるからであるという。英雄、ところを得ずであった劉備をもりたてたのは、兵一万に匹敵すると称される関羽と張飛、それに智恵のかたまりとも言うべき諸葛亮などであった。劉備主従が心を合わせて目的に向かって邁進する様は、人の感動を誘わずにはおかない。かれらの生の軌跡を、是非読んで味わってください。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年　千代 理絵＞

「ももこの世界あちこちめぐり」
さくらももこ著　集英社

この本はどこか旅に出たいけど、お金がない、という人必見です。マンガ家としてだけでなくエッセイストとしても有名な、あのさくらももこが、世界のあちこちをめぐって書きあげた、紀行エッセイです。

世界各国の料理や観光名所など、筆者が実際に見たり味わったりした感動

が、彼女独特の文章とイラストでまとめられています。読んでいる自分も旅を楽しんでいるような気にさえなってしまいます。様々な国を訪れるにあたって起こった事件やエピソードなどが柔らかい文章で描かれているため、活字嫌いの人でも楽しく読めると思います。活字嫌いの読書入門にも最適です。

さくらももこの作品の特徴である、あの口語的で読んだ後残る、すっきりとした印象がもう一度本を開きたくなる気を起こさせます。

アメリカの大自然の中、その自然の壮大さに圧倒されたことや、いきなりのナンパにあったこと、あまりの料理のおいしさに、食べすぎてお腹をこわしたことなど、楽しいエピソードも満載です。

今までの彼女の作品は、自分の過去をエッセイにまとめたものが多かったのですが、今回は今の彼女の目で見た世界を描いているので、さくらももこの本を愛読している人の目にも、とても新鮮にうつると思います。

彼女と楽しい文章と共に、世界をめぐる旅ができる、お薦めの一冊です。

＜機械工学科３年　山下 真樹＞

「闘うプログラマー」
Ｇ．パスカル・ザカリー著
山岡洋一訳　日経ＢＰ出版センター

皆さんは、「プログラム」と聞いて何を連想するだろうか。私の場合は、ワープロやゲーム等のアプリケーションソフトが頭に浮かぶ。この本の題を初めて聞いた時も、その様なソフトを作っている人達の話だと思っていた。

が、読んでみると、なんとこの話はOSである「WindowsNT」の開発物語だったのである。

最初はOS/2という、ＩＢＭ製のOSを視野に入れたものだったのが、マイクロソフトの自社製OS「Windows」が予想外に売れてしまい、急遽 Windows寄りに設計が変更された事など、コンピュータ関係の話が好きな人にとっては興味深い話が満載である。また、NT開発者達の個性的な性格も面白い。

「マイクロソフト」と聞いてまっ先に頭に浮かぶ人といえば、眼鏡をかけ、子供の様な顔をした中年男、ビル・ゲイツだと思うが、この本では、彼はあまりでて来ない。あくまでNTの開発に目を向けている。その証拠に、この作中で一番インパクトが強く、一番でてくるのは、ビルではなく、デビッド・カメラーというNT開発チームのリーダーである。

彼らが目指した「OSの信頼性」。本を読んでいると、彼らの血の滲むような努力が感じられる。私はマイクロソフトが嫌いであったが、これを読んで少し印象が変わった様な気がする。

だが、先日学校でWindowsNTを使用しているときに、見事にOSごとハングアップした。どうやら、彼らの努力はあまり実っていないらしい、と思ってしまった。

＜電気工学科３年　菊地 洋行＞

「メロスになれなかった男達
”EZAGO²”！」
山田守、ゲッターマン音太、
荘口北男　　慈虐社

この本のコンセプトは、「心が堕ちぎみで、毎日が気怠いと思ってる時に読むと少しだけ優しくて少しだけ哀しい気持ちになれる本」らしいです。
内容は、著者一人一人の、成長がはやすぎて、ＩＱが追いついていかないCHILDHOODの体験談なんですが、今でも、その話の後遺症が著者達のリスクになっているというとても微笑ましいものです。
それらは、誰もが数度は通るといわれている、「ずっと心の奥底に封じ込めていた、もしくは一生封印したい思い出。思い出すたびにどこかに走り去りたい、このまま海の底に沈みたくなる。」といったものばかりで、いい意味で、生まれた意味をYOSHIKIナイズされながら、生きていく事の罪をTAKURO並に考えさせられるネタばかりです。
中でも、私が個人的に一番気に入っている話は、
「母子家庭で育った著者が、小学校低学年のときの父の日の宿題に「お父さんについて」の作文が出て、お父さんのいない著者がそのことを言って、自分は慣れてしまっているから何とも思っていないのに、友人達が先生をこれみよがしに責め立て、二十歳ぐらいの新米教師を泣かせてしまった。」
という体験を赤裸々に語りあげた
「5 ～10なのに.....」でお薦めです。
他にも、車のワイパーの話、体育のサッカーでのＰＫ戦の話、裏山での焚き火ごっこの話等盛りだくさんです。
まあ、慈虐社はとっくの昔に倒産したんですけれど、古本屋ででも探してみて下さい。

＜物質工学科３年　根本 千裕＞

「シーラという子 ---- 虐待されたある少女の物語 ----」
トリイ・Ｌ・ヘイデン著　早川書房

その子は、垢で黒ずんだ顔に敵意むきだしの目をした、六歳にしてはずいぶんちっぽけな子供で、ひどい臭いがした ----名前はシーラ。季節労働者用のキャンプに住み、傷害事件を起こしたために精神病院に入ることになっていたが空きがなく、著者トリイの教室に送られてきたのだった。
トリイは、あらゆる障害児教室から見放された自閉症や強迫神経症の子供達八人をすでに抱えていた。シーラは決してしゃべろうとせず、泣きもせず、何かやらせようとすると、怒り狂い金切り声をあげて大暴れする。ただでさえデリケートな子供達がパニックに陥った。こんなに扱いにくい子供ははじめてだった。
けれども辛抱強く接していくうちに、彼女が知的障害児どころか、ずばぬけた知能の持ち主であり、そして、心身に虐待による深い傷を負っていることがわかる.....。
家庭内暴力、貧困、性的虐待に蝕まれた少女が、堅く閉ざされた心をおそるおそる開き、ひとりの献身的な教師と深い信頼の絆で結ばれてゆく姿を描いた全米ベストセラー。22カ国語に翻訳され、世界中で大きな反響を呼んだ感動のノンフィクション！

＜建設環境工学科３年　栗谷川 朋子＞

「星の王子さま」
Antoine de Saint-Exupery著 岩波書店

「星の王子さま」は、多くの人が知っている本の題名である。しかし、その題名の知名度と比べると、内容を知っている人は意外にも少ないのではないだろうか。
子供向けの本に思えるが、読んで見ると大人向けに書かれた本に思われる。なぜなら、
「そんなことは目に見えない。心で見るものだから。」と文中でキツネが言っている。この成長していく上で忘れようとしていた何かを思い出させてくれるからである。
例えば、目の前に円を描いただけの絵があるとする。目で見ただけでは、ただの円としか思えない。しかし、これはボールなのかもしれないし、月かもしれない。当たり前のことかもしれないが、このように心で考えて見ることが大切であり、むずかしいと思う。

でも、子供の頃の私なら、さほどむずかしいことではなかっただろう。
「大人はだれも、はじめは子供だった。しかし、そのことを忘れずにいる大人は、いくらもいない。」これは、今日では子供が、子供心の純真さを味わわないうちに、大人にならされているという人が多く、そのためその人たちが子供心を思い出し、本当の大人になれるようにとの願いが込められているように感じられる。
子供心を思い出したい人は、読んでみてください。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科３年　平澤　典子＞

「姑獲鳥の夏」　京極夏彦著　講談社

最近、ミステリが読書界では人気らしい。実際、私の耳に入ってくる「面白い本」もミステリ小説の場合が多い。そしてそのミステリで絶大な人気をほこるのが「京極夏彦」の書く「京極堂」シリーズである。
もともとミステリはあまり読まないせいかもしれないけれど、過去一回の挫折を経ながらも、ついこのあいだ読破したのがこのシリーズ第一作目「姑獲鳥の夏」だ。過去一回の挫折というのは、最初の五十ページ、主人公とその友人の問答が難しすぎてよく理解できなかったのだ。内容は「霊、妖怪の信憑性」。しかし、その五十ページは我慢のページだ。ひたすら我慢して、考え、理解する。なぜならそこには事件を理解するための、解決するための思考がつまっているから。
物語は奇怪な情報が主人公の耳に入ってしまったことから始まる。一向に産まれる気配のない妊娠二十ヶ月の妊婦。さらに彼女の夫の完全密室の中での失踪。そして彼女の実の親が経営している産婦人科で次々といなくなる新生児。これらの独立した事件が一つになったとき、私たち読者はその影にある、深い、とても深い悲しみをみることになる。一人一人が他の人のために良かれと思ってしたことが、相手を想うがために続けたことが、すれ違い続けやがて不幸な一家をつくってしまう。
話の内容もさることながら、筆者の構成力もまたものすごい。ぜひ一読をお薦めします。

＜機械工学科４年　石井　宏明＞

「フロントミッション最前線報告」
この本は、近い未来に隆起するハフマン島を巡る、オシアナ共同連合（ＯＣＵ）とニューコンチネント合衆国（ＵＳＮ）との戦争の物語である。
主人公であるロイド・クライブを通じて本当の人の強さや弱さを知ることができ、戦争というものが、いかに残酷で無意味かが理解できるはずだろう。
また、この話はゲームが元になっているが、多少内容が違っている（ある重要な人物が死ぬ）のでゲームをした人も十分楽しく読める。
最後に、主人公のライバルであるドリスコル大尉が愛読していたドストエフスキーの「罪と罰」という本があるが、こちらもなかなか面白いので読んでみることを薦める。

＜電気工学科４年　廣川　出海＞

「これから30年日本・陽は必ず昇る」
唐津一著　ＰＨＰ研究所
この本では、日本の現在の技術力やこれからの技術の展望が実際の企業名を出し、エピソードを交えながら書かれている。エピソードのいくつかには、多くの人が知っている話とは違う話もある。そして、日本の優れた技術力がこれからの日本を救っていくと考え、今の不況はただ金融業界や政府が悪い状況になっているだけで、そんなに悲観的にならなくていいと言っている。
この本を読んでみると、日本の企業がこれほどすごいのかとただ感嘆してしまうだけである。
例えば、半導体では、原料のシリコンの供給は日本の信越化学とコマツ電子だけで世界の七割を越し、それを包むパッケージは新居浜の住友化学の工場で世界需要の68％を供給し、パソコンのＣＰＵのセラミックパッケージを京セラと日本ガイシがほとんど100％を供給している。また、自動車のボディーをプレスする三千トン以上の大型プレス機は日本の独壇場である。このように素材・製造ともに日本のメーカーが君臨していることはあまり知られていないし、他の分野でも日本の企業ががんばっているのがよくわかる。これでなぜ今不況になっているのかが不思議である。

＜工業化学科４年　村山 英司＞

「pLaTeX2e for Windows Another Manual」
乙部厳己、江口庄英著　ソフトバンク

数学者であるクヌース先生が作り出した驚異の組版ソフト「TeX（てふ）」。このソフトを使えば複雑な数式はもちろんのこと、文書のレイアウト・図表などが目的どおりに整形でき、その仕上がりも素人が一見したくらいではほぼ書籍（印刷物）と見間違えるほどの美しさである。

TeXはフリーソフトとして出回っており、この本の付録CD-ROMにもTeX一式が収録されている。この本はVol.0、Vol.1、Vol.2の3冊からなり、Vol.0が主にインストール用、Vol.1が初心者用、Vol.2が上級者用という構成になっている（もちろんこの本自体もTeXで書かれている）。TeXのことを説明している書籍は数多くあるが、TeXのことをあまり知らない人にとってはこの本が最もわかりやすく、また詳しく書いてある（と思う）。TeXを使いこなせばPage Makerなどの高額DTPにも負けない出版物を作ることができる（もちろん、レポート作成にも強い）。

これからTeXをはじめてみようという人（特にWindowsで）はぜひ。また、UNIXやMacintoshユーザー向けには、「日本語LaTeX2eインストールキット」という本があるのでお試しあれ。

＜建設環境工学科４年　磯上 幹夫＞

「封神演義」（全三巻）　講談社文庫

私の推す本は、講談社文庫、安能務訳の封神演義（全三巻）です。

封神演義は、中国の三大怪奇小説の一つで、史実である商周革命をもとに書かれた小説です。

概略は、殷周革命とそれに乗じての仙人、妖怪の戦争を軸に、殷が倒され、太公望が戦争の犠牲者となった仙人達を、神に封じるという事で終わっている。

封神演義はこれまで外国語に訳されたり、外国に紹介されることがほとんどなかった。その証拠に、国語辞典や百科辞典にもほとんどのっていない。その理由は、本の中に詳しくのっている、儒学者の陰謀である。

この本は、字が細かく、難しい漢字もかなり多いが、非常に面白いです。一度最後まで読んでみれば、その凄さがわかるでしょう。

注：この本は、少年ジャンプで連載されている封神演義とは、まったくの別物です。むろん、こっちが原本に忠実です。話が違っているからといって、怒らないように。

＜ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科４年 石井 梨絵＞

「スピード」
石丸元章著　飛鳥新社出版

麻薬、覚醒剤に少なからず興味はあるが、実際に手を出すのは怖いという方に、「スピード」　石丸元章著　飛鳥新社出版をお薦めします。ドラッグについて書かれた本は多々ありますが、この本ほど一般大衆が持つドラッグに対する好奇心を満たしてくれるものはないと思います。

読むにつれ、テンションが高まりあたかも自分もドラッグ体験したかのような感覚を得られる特典つきです。

著者自身精神安定剤を服用しつつ書いた文章は随所で支離滅裂であり、しかしそれが現実を物語っています。ドラッグにハマると人間はどう狂うのか、笑うに笑えないドラッグノンフィクション。取材と称して自らありとあらゆるドラッグにハマり始め、その間に遭遇したトラブルから幻聴、幻覚、幻視体験の末に味わった最悪の４年間をつぶさに記録、ジャンキーへの狂気過程を赤裸々に描いた壮絶レポートです。おまけに巻末には参考資料として著者が逮捕された時の書類のコピーなどが付いています。留置所の中で書いたというあとがき２が何とも生々しいです。

「スピード」の出版の約１年後、「アフタースピード」として、覚醒剤所持で現行犯逮捕後、留置所、拘置所、そして裁判所での様子を詳細にレポートした本が出版されました。

そちらの方もあわせて読んでおけば、と思います。

夏目雅子さんもポスターになっているので皆さんドラッグの使用はやめましょう。

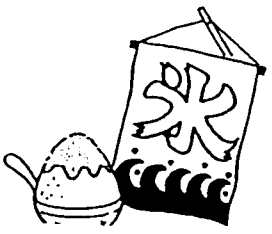
図書館便り

☆学年学科別図書帯出冊数（平成９年４月～平成１０年３月）

学　年	１年	２年	３年	４年	５年	合　計
機械工学科	５	１０３	６８０	１７１	１５０	１１０９
電気工学科	１７	６３	７２１	２８９	２０１	１２９１
物質工学科	８５	９４				１７２９
工業化学科			９８９	４１４	１４７	
建設環境工学科	９	１５４	２４４			６４９
土木工学科				６３	１７９	
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科	７６	１４８	１２７	２７８		６２９
合　計	１９２	５６２	２７６１	１２１５	６７７	５４０７

☆図書貸し出し冊数ベスト１０（平成９年４月～１０年３月）［学年は昨年度のもの］

１	村山　英司	（工業化学科３年）	２１７冊
２	吉成　悦子	（工業化学科３年）	７５冊
３	服部　直明	（工業化学科３年）	６７冊
４	鈴木　友美	（工業化学科３年）	６３冊
５	赤津久美子	（工業化学科３年）	５５冊
６	遠藤　健太郎	（電気工学科４年）	５３冊
７	田山　純江	（工業化学科３年）	４７冊
８	佐藤　允	（機械工学科３年）	４４冊
〃	川口　友美	（工業化学科３年）	４４冊
〃	森田　千絵	（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ情報学科２年）	４４冊



お知らせ

☆☆☆　臨時開館について　☆☆☆

○ 開館期間　８月１７（月）～夏期休業終了日まで。

ただし、土・日曜日は閉館とします。

○ 開館時間　午前の部　８時３０分～１２時００分まで。

午後の部　１３時００分～１７時００分まで。

※　夏季休業期間中は「臨時開館日」を除き館内所蔵図書の点検及び整理のため閉館します。

☆☆☆　特別貸出について　☆☆☆

○貸出手続き　・・・・　７月８日（水）～７月１７日（金）

○貸出限度冊数　・・・　５冊まで

○貸出期間　・・・・　７月１８日（土）～夏期休業終了日

☆☆☆　卒業研究生特別貸出について　☆☆☆

○卒業研究生は、所定の手続きを行えば、別枠として５冊の貸出が認められます。

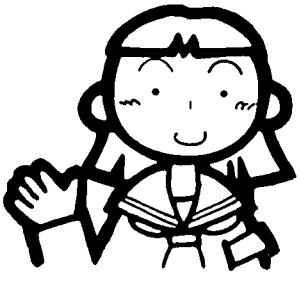
☆☆☆　その他　☆☆☆

○購入希望図書がありましたら、最寄りの図書委員を通じて、あるいは、直接図書係に申し込んで下さい。

感想文等募集のお知らせ

今年度も、学生の皆さんに、より読書に親しんで頂くための一環として、恒例の「読書感想文等コンクール」を下記の要領で実施いたします。

昨年度までは、読書感想文のみを受け付けましたが、今回は、従来通り読後の感想文でもいいし、あるいは読んだ本の紹介文、読んだ本に対する評論文でもよい、というように自由度をひろげました。自分に合ったスタイルで、読んで感動した本について書いてもらいたいと思います。ふるって参加して下さい。

記

１．形　式	１６００字程度の読書感想文、本の紹介文、本に対する評論文を テキスト文書、または手書きで提出すこと。 （テキスト文書の場合はフロッピーを提出またはE-mailで提出する。）
２．募集部門	以下の二部門で募集します。 ・低学年の部（１～３年生対象） ・高学年の部（４、５年生対象）
３．提出締切	平成１０年　１１月末日
４．賞　品	低学年、高学年の部とも１～３位まで図書券が贈られます。
５．その他	・感想文等は *手書きの場合は、図書館事務室に提出すること。 *フロッピーの場合も、図書館事務室に提出すること。 *E-mailの場合はohtsuki@fukushima-nct.ac.jp　宛。 ・それぞれの部門の第１位の感想文等は、次回発行のビブリアに掲載する予定です。 ・応募は一人一編までとします。